



黒田直

黒田 直先生をおくる

理学部地球科学教室の黒田 直先生は、平成 13 年 3 月 31 日をもって退官される。先生は、昭和 42 年 4 月に教育学部に赴任されて以来、34 年間、静岡大学に在職された。理学部には、昭和 45 年に転任されて以来、31 年間いらしたことになる。その間、昭和 44 年、46 年には日本海、フィリピン海の地質学的研究のために東大海洋研究所・白鳳丸に乗船された。また、昭和 51 年には静岡大学コロンビア—アンデス調査団の一員として、コロンビア、ペルーでの地質調査に従事されている。さらに、昭和 63 年には南太平洋産マントル起源高マグネシア安山岩の研究のため、ニューカレドニア、ニュージーランドに出張された。この間、黒田先生は、研究面では、Boninite（無人岩）の再発見という大きな業績を上げている（Kuroda & Shiraki 1975 ほか）。Boninite は、現在では、未成熟島弧のマグマティズムを理解するときの鍵となっている岩石であり、まさにセレンディピティーに恵まれた方である。教育面では、教育学部で 5 名、理学部で 50 名が黒田先生の研究室から巣立った。このうち 3 名が、本学理学研究科修士課程を修了された。他大学の大学院に進学された方も多く、4 名の方が学位を取得された。校務では、理学部および全学の各種委員を歴任され、ことに、部内教務委員長、入試委員長という重職を担っていらっしゃることは特筆される。また、平成 2 年度、および 7 年度には地球科学科教室主任を務められ、地球科学教室の運営と発展に尽くしてこられた。さらに、平成 9 年から今日に至るまで学生相談室の相談員として、進路に悩む学生諸君の相談役を務めてこられた。

黒田先生というと、「がまん強い、ねばり強い、そして頑固」という印象を持つ。このことは、研究面では、フィールドの産状と岩石の湿式分析にこだわり続けたことに現れている。このこだわりは、岩石学の近代化の流れに乗りきれなかった面を産んでいるようでもあるが、野外と「もの」にこだわるという地球科学の王道を守り続けられたところは敬意を表するに値する点である。教育面では、さまざまな性質を持った学生をねばり強く、また厳しく指導してきたところに現れている。実験室やゼミでは、厳しかったとの話を聞くが、学生が脱落することもなく卒業していった事実から考えると、学生の立場に立ったきびしさだったのだと推察される。

頑固というと、とっつきにくい印象を持つが、黒田先生は卒業生にいい印象を残している教官の 1 人である。卒業後 20 年近くたってからも、彼らが会って教室の思い出を語るとき、定番のように黒田先生の真似がでることなどは好例である。

さて、黒田先生が退官される今、各国立大学は独立行政法人化を目前にしている。各大学は、それぞれの特性を生かした変革が要求されている。静岡大学理学部地球科学教室も将来に向けてポジティブな改革が必要である。しかし、研究教育機関である大学は、ただ世間の流行におもねるような変革をすればいいのではなく、地球科学の基本である、自然と直接対峙し、そこから十分に吟味されて取り出された物質や生命遺物を近代的な方法で解析するような研究教育を行わなければ、足下をすくわれることになる。黒田先生が実行された、「基本に忠実に、ねばり強く、そして頑固に」ということを旨に、改革を進めていきたいと考えている。

黒田先生の教室に対するご貢献に感謝するとともに、ご退官後も活躍されることを切に祈って、歓送の言葉としたい。

2001 年 3 月

平成 12 年度理学部地球科学教室
教室主任 北里 洋